Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P1-154 卵巣成熟嚢胞性奇形腫のMRI画像と病理組織学的所見の対比—加齢による変化の検討

信州大
山田智子，伊東和子，花岡由里子，岡　賢二，堀内晶子，加藤　清，増澤秀幸，塩沢丹里，小西郁生

【目的】卵巣成熟嚢胞性奇形腫の術前診断はMRI上脂肪抑制像や，chemical shift artifact等の所見よって比較的正確に行える．しかし最近我々は，脂肪成分の所見に乏しく術前診断が困難であった思春期前少女および高齢者の症例を次々と経験し，奇形腫構成成分が加齢によって変化する可能性が考えられたため，これを検討した．【方法】当科において1999～2003年に手術療法を行った成熟嚢胞性奇形腫69例（20歳未満9例，20～30歳代43例，40歳以上17例）について，術前MRI画像と病理組織切片をretrospectiveに解析した．【成績】MRIは69例中51例で施行され，うち43例で脂肪抑制像も撮影されていた．MRIにて脂肪が同定できなかったのは6例で，内訳は20歳未満が2例，20～30歳代2例，40歳以上2例で相対的に若年者と高齢者に多い傾向があった．嚢胞内部に脂肪でなく漿液が貯留していた症例は20歳未満の2例であった．病理組織学的検討では，皮膚重層扁平上皮，皮脂腺，汗腺および毛髪は全年代で約90%，軟骨，骨は30%に認められ，年齢による差異は認められなかった．一方，皮下脂肪織は20歳未満4例（44%），20～30歳代32例（74%），40歳以上5例（29%）と性成熟年齢に多い反面，神経組織は20歳未満6例（67%），20～30歳代20例（47%），40歳以上1例（6%）と加齢とともに減少する傾向を認めた．【結論】卵巣成熟嚢胞性奇形腫の構成成分は，加齢性変化をきたす可能性があることが示唆された．特に皮下脂肪織は若年者と高齢者で少ない傾向にあり，これがMRI上の偽陰性に影響する可能性がある．

P1-155 悪性転化を伴う成熟嚢胞性奇形腫6例の臨床的検討

順天堂大
宮井健太郎，木村美葵，加塚有紀，金田容秀，太田剛志，高橋　晃，田中美香，荻島大貴，吉田　学，木下勝之

[緒言]悪性転化を伴う成熟嚢胞性奇形腫は成熟嚢胞奇形腫の約1%で稀な疾患であり，治療に抵抗性を示し予後不良である．我々は，1993年4月から2004年3月までの12年間に悪性転化を伴う成熟嚢胞性奇形腫6症例を経験したので文献的考察を加えて報告する．[症例] 頻度は同期間の成熟嚢胞性奇形腫484例中6例で1.2%．平均年齢は，55才．症例の進行期は，Ia期1例，IIIc期5例で，手術は，optimal（肉眼的残存腫瘍なし）が4例，sub optimal（肉眼的残存腫瘍あり）が2例だった．生存期間の中央値は，11.5年．予後は，4例が原病死，2例が無病生存．術後化学療法が奏功した例はなく，sub optimal，2例は現病死，optimal，4例のうち2例が生存している．[結語]過去の報告と同様に予後不良であった．術後化学療法は，効果が低くかった．ゆえに，積極的な外科切除を施行することで，肉眼的残存腫瘍を無くすることが肝要であると思われた．

P1-156 卵巣粘液性腺癌の臨床病理学的検討

鳥取大[1]，岩手医大[2]，自治医大[3]，国立病院機構四国がんセンター[4]，大阪市立総合医療センター[5]，九州大[6]，川崎医大[7]
島田宗昭[1]，紀川純三[1]，庄司忠宏[2]，杉山　徹[2]，大和田倫孝[3]，鈴木光明[3]，大下孝史[4]，日浦昌道[4]，津田浩史[5]，加来恒壽[6]，藤原恵一[7]，寺川直樹[1]

【目的】上皮性卵巣癌に対しては可及的腫瘍摘出および白金製剤とタキサン製剤の併用化学療法が標準的治療法として行われている．しかしながら，近年，明細胞腺癌をはじめとして組織型に基づいた治療法選択の必要性が指摘されている．本研究では，粘液性腺癌に対する至適療法確立の一助とするために，多数例の卵巣粘液性腺癌を集積して臨床病理学的検討を行った．【方法】1998年から2003年の間に初回治療を行った上皮性卵巣癌593例のうち，central pathological reviewにより診断された境界悪性腫瘍を除く粘液性腺癌85例（14.3%）を対象とし，臨床病理学的検討を行った．【成績】粘液性腺癌症例の年齢分布は12歳から84歳であり，平均50.6歳であった．臨床進行期はI期50例（Ia期25例，Ib期2例，Ic期23例），II期7例（IIb期1例，IIc期6例），III期23例（IIIa期1例，IIIb期3例，IIIc期19例），IV期5例であった．I，II期の早期癌症例における3年生存率は93.3%であったのに対して，III，IV期の進行癌症例では54.9%であった．III，IV期症例のうち，optimal operationが可能であった19例の予後は，不可能であった9症例に比して明らかに良好であった（3年生存率；78.4%vs. 21.4%）．評価可能病変を有する進行癌17例のうち3例（CR1例，PR2例）が化学療法に奏効し，奏効率は17.6%であった．【結論】卵巣粘液性腺癌は化学療法低感受性であることが示されるとともに手術完遂の重要性が示唆された．

NII-Electronic Library Service